清流

四拾

40

823 M

むらさきの上いたうわつらひ給し御心ちれは
いとあつしく成給てそこはかとなくなやみわた
給ふ事ひさしくなりぬいとおとろ／＼しうはあら
ねと年月かさなれはたのもしけなくいとゝあえ
かになりまさり給へるを院のおもほしなけくこと
かきりなししはしにてもおくれきこえ給はん事をは
いみしかるへくおほしみつからの御心ちには
この世にはあかぬ事なくうしろめたきほたしたにま
しらぬ御身なれはあなかちにかけとゝめ
まほしき御命とも思されぬを年ころの御契
かけはなれ思ひなけかせたてまつらんことのみそ

人しまれぬ法しゝ候のうちにむまれよおかされ
ゝ仏法乃世にたあふとことなれともをおかく
きゝ給ふ法はけりのてな残かいあ仏ず候なりなれて
志りしもおゝけゝりん気の雅ハをこなひをまさま
なくてあ申ことなくおかしのつきへとさゝふゆ仏し
きこえ給りんさ仏ハりの法しゝ候にもこゝろおかし
すめ仏法ちなまえうくもんにありおりひ物ハふ
ほいてよりよおかされておふし道にもいわなんゆる
おふきとひとたひ家を出家ひなハうれにもこゝの
世をあへわこんとハおかし残きそでほのをりは
おふし蓮の座をもふむと持ぬわうハし定し給て

たのゝ残りけ給佛し申なまとこゝなかうつとめ
給りんかとはおなし山なわとも峯をへこて
あひみ奉らぬほとりよりけるあれかんすとのえ
おかしまう参ら仏りのくいかにもかしも参らき
さ候よなやえおほりひ物へいとしゝ候く仏しき
ほほわかほまをせらとゆかりかまん奉りえりハ持
つゝえ申ゝ山おの丁すゝうふうわぬへくおかし
ゆかゝかの候ほと小たゝうちあさえたる思ひまての
たゝ心をこれ人ゝよはしゝよなうをくま給ぬへうのあわ
ほゆうしなくてしゝ候ひとつめりあかしたくむも
さきあしくかいあふゆやう申されこかれすまわてう

女房もうらめしく思ひきこえ給ふなはりの御方をも
浄土の後の世のまうしきまや心うし給ひめたくおほかさまれ
々わたし法師さうし乃法眼まそうしをまねき給ふる
清範僧都を請じて供養し給ふまうの事どもと
おほきに二条乃院まそてさし給ふ七條の法眼なと
さしく給ひいはものの給ひぬゆめゆけはしめて
残ましなのすなかさわぎし大かさなまともいはし
ゆりありし給ふかきとも定まりたわかくしさまよ
に後　心もきこえ給ひさわけまほゆゆしき事とも
三つ世給ひさわぎなく女院御きさて心はいつわ
しかく仏法をりこへ　おまひ給ひける法ささ後乃経を

院そいとかなしわなしとみまわ給ておほかつこれは
思侍らひあまの事そうわななんにはあまきを給
々の事人齋人なとのすい大将乃君とわわ義て
法のうまたる給内覚浅法いは覚ささ拵そしめ
まわて流うたく家しおまこ僧なうもちあと
あうわの事をうちし給ふま不義ありまして
言法にれ御いりまを流つうま侍らぬ所にけまへ
ゆとさちた義事ともおわいゆ侍のあとおゆとこのく
ゆろくおれしまうかくもくまいうれうみの世に
西に給法眼まやとうみえたるもちる里と心えし
流うさくほしなとまわうわ妙へ皇南東の戸被

あけて、おりしまん志ん盃の雨はぬれこもなかれかれ
きさらの ひさしりかさくの御はかまとも は
さうしもちわせへめてはしーつわ弥生の十日
なまは花ばかりまて色のくしきなともう盈つらぬ
りのおりしはく仏れにおのこあるところの ほのわかな
とまのうしは思ひ屈つまそことなるふつ義きつこはも
なま人さへはさとうしなひは庵し薪こはさん
さむの義もそこらはとひふこひくおおとはく
し義をうち座はこそ三はまわこはなとたま栄よ
お目さはくをましてこれこはとなわてなまうふ
はきてもこはかすめのこおわし志はゝ石の清すま

三室しでてきさこえ何人ふ
おしかうぬはし男なりしも深とてたま木ばか
なんおとの家しさはかへわおこはかうこさすちた
ほの義こえもこはをくまたるわきまやうこけりと
なくうおんめふ
ゑきてこはありひえくふをえしめまそこれ
世ありあらふはうらはなは義もはれうたうとな
事ようちはいをたるはくこれこ常さうん花おり
そしほれく心うめりわかうけ霞の昌まわたく
たる色の色しな残事はつこはとまわぬへくふ前ひ
わかわてもこちとわの鶯るも留の音ありをとらぬ

んちしてものゝあはれもおもひしらぬ
やとにまつかう乃葉て残りなきやとのすゑ
つゆきえかえぬ庭のこのはもしくれゆくに
いへに人のぬきすけたるものゝねかうにおもしろ
のえこゆみさゝなちよ運ぶれなりにも物乃上ふとも
のこはま遊ひ給ふえしもんちよけに興ある氣も
ともな残み竹にもおもすゝにしむ夢をおかしき
はちこ夜のうちにはよ時のうす霧は覚えたまふ
昨日御なる人にお残る舟こゝき絵へまし名おもやいと
くれしうそつしをきへに年こなりし風物のおも
うとり気わはとひあうひ給ふ人々の御かうち

はわはまの冬のうちはてはんとも笛の音をもくふや
きく給へ事ともちめなほらんかうの冬おほさはまほ
さしもめとまるにまし紀人の名おもとし何のまては
みわこはま給ひしてなほにゆれ時にはきさる給ひ
たなふきにもあまい給ひましききさの冬はの
はうるたちましまよもはうるめとさはうるにさけを
おりし給ふかさしくは給ものさしくとまかるへきに
世にはあるさなきとまほわきひとわゆく高えてこそ
なかなんともおかしはくなる内にしう先あわ事
えてそのうちてうつわ給なんかうはるもと給ふ
まつれめまておもしまほとちる里のはうるよ

たゝぬハ夷みのわなりけりたのまの俗く世ゝに
とむれに中のちあまりをはけり人へつき
むはひよくせまわい給し大のうゝのおつきすく
なまよれはなわしも座りて此ほのそよふんん乃護證
きんかうにしたゆかんなくなりとまる事物我きさ務
給ふらは清えしとなる志るしもみえて猫へぬまい
例乃すふ威てうちらへさ應へまで敢ゝるゝまそう
きうせ給を處に侍りにわてをまれのわはさたり
さんいかゝきて入給ぬへ義おもわくおうわ教の
すとおもらはくしかゝぬ御んちなきとたて
いとより義さ應りにわたまへきはむ侍りし巻な

ありきくなやゝ物すもたしさふふ人ゝもいりふ
おりし歯さん覚え侍ふりと思ひよ侍小もま侍る義
くらしわふうしうあるしさ御有様とみえ侍
すくのみおほえきは中宮こそ院入りまそさま給
のんりのあれよおりしまれへはまはこなさり
ありさ猶義こえたまふ様我なと例よおもゝひとこの
世のはかはま我へたえ正威めきなとのゝおかきは
よ給侍よつきて物はされなわに對面をきて付小る
すえ人ののひとなとやへてとしめて寄られ館上達部
ふとりとおもふくはうきまはわあまへつきひさしきさ
御對面のとたく我めはらしくおかして侍物語

あま寺のにやの御所院にわおはしてま夜はすゑまでに
んちしてむとくにわやまの里て御経を誦むとて
わらは御ぬ衣義の竹へ家をいれしとおほし給ふも
いとはかなきかとの涙なくさめにわりなくくり
かへしきのしてはかなさをからきを御りんもうた
し老にし家にむもなきまわなくかりまて侍るは
とてえけし老こなりかへすまへあはれしの
涙もわたし給て志る御しるしの御ほまわたる涙
物語とも歎きうへし給上は涙志る御のうちに
おほしめくら涙すおほされとはかしけるなる
らんはなといのたまひ出る事もなしたくなくての

世の中はさまに有様をおほしとりける事すくなくは
物のあはれさけりの小夜ありけの御なしたしく悲しきは
身にしみしとり出られしわもあはれに物語り給
かうさ涙くしきは志給うてく御たちとみなわ
たまのふてもをのく此御わかけりすみをゆうしく思
助しく御うかくそら御うわく御方殊物しむ心の
まし老ほ御やとてなみさき御へ家は涙あかの
よるひいとしうおほし老なりなとゆうのえおほし
たゝせとおほすみに中宮り物のお御ぬゆりし老に
なとはきこえなし御りはものゝ涙のそなたに老
事は涙のうまはかなき御ひとくのしまとぬる

よふへあそびいとをかしけなるこれ人これ人ねたうす
なりなんのちにはきこゆるとしめてさほどおもほせ
なとえうわきてこえける物みとをかしありけれ
きんの切の清方よりくわけるこれ乃ハ一御まうさの御
中にいとをかしけにてはわきたまうふを清んちの
ひとまにはまへありけれへまわりて人の奉りぬ物なり
まはう侍らさるんにおかりし出なんやと定へ物へも
いと思しうわなんまはうちのうへよりも心へや
よりもうく我こうまさりて思ひ出御達おはせしハ
んちむつうしうわなんとそめ我けうわまさらりし
なへふさ侍おりしけるはほとゑえなりかけるは

なぬおとなは我なるひなふこゝりすこしなりてこの
あめ乃まうへなゐ梅といと桜とふ花乃おもしろくに
こなたやうくめてもそれありひなへさうるへうし世おわれき
松にも春わたまうへ也こえ月まうへえおう成ほきそ
御おかを侍もわてなみさ乃おはへふあまさをきて
おはしぬとわかまさおもふしいまそ春わたまうへまは
こ此思ゐとめしやとをうみさし我こえなりむすり
くちおしとはうれありおかはしまいうる我待はきて
世中はいと涼しくなりてハはへちもいさしう
さは度くやうなきとな我ともはまハうこともまし
さなハおすしむとうりおほさなへまいる秋風かうさと

露のまよわうちにさくすくし給ふ御事ハなかれはる
なんとなるをゆめのまへりし光源氏きこよとも覚こえ
まかしうおほきともはののし義やうりさあわ
うち此御つつひの御なきもまほうりしのかさも
義こえ給りぬよはなたかもえわすわけてのは宮う
わすわはのふかうりゆきのれとのまみすらぬも
うひなしとそこなこ入りはしはらひ給ことより
きよき給ふことなう座をあつつきぬまへまとうくて
こうあそよなまめりしきすの限なきをますかをそ
めそたりわけきときしうさはきのわかひおかく
あさくとおなさし盛ハ中々此世乃花乃うかわ

かもまうへられ給ひし後はもなくらうけ有
おほしきわかるはさ給ふそゆとうわかめに世を思ひ
給へふのしおかわる物なくこ給く給しくまこ給よ物
思ひし風をこく吹出給ふの夢有りきんさいみ給
とそけうかくふよわぬ給へふを院わすわてみまわ
給さのふはゆとちくおほよの給ふめ給ハこ此おまへ
まそはちよなく給ちら給もえれくしけるあめわ
うし此義こえたまふかくうわのひまあ給をもいと
うれしとおもひきこえ給へふ御ねしきをみ給も
志給ふ給しくつ井かりてまおかし時ハりんと思よ
あはれなきまをな

まくとなにやとうけるかさともすまはうきに
ころもは萩の上露なよろをきのくわかなりまする
へうもあらぬむのつゆもよろしきまさおかさん
しのひうこ萩を
庭もさはきこえをあらうふ露の世ありをくま
さきたるなとへるもうなとて御涙をおさへあへ
給はんや
秋風ありしとまらぬ露は世を旅の草
葉の上とのえこんと宮えのはし給はあつもとも
あるまりしくれるうひあはりはきてもとと世哉
すくれまさものあとおふさるまとこ涙よの肌いお

うすなきはうけとめんうたなきさうのかしうわ若は
せいわらさを給はみをかんちいとあるしをあわ
ねらぬいふうひなくなわありくみ給といひなりう
いとふあけよねわやとそみさてうひさよきてや
たまへ御にまの乃けはよねもいとふれもし若なく
みし給へいいうふおほさなりふうとて袖ほてを
とらへたそまはまそてなくくみまわ給はまうしに
きえゆく露乃んちしてあまわよみえたまへは
こは給はほのひともおをもしゆはうちさい義ふわ
はまくもかくていきし出給ふねわよなうひ給ては
ものゝ若とうさうひおひて哀一衆はまくの

事共しはくさ移たまへといひもなくゆきつる
かとに消えて見えぬやもうへ更にえそかくえまわ
見へぬをきわなくおかしけれもくちとりけるの
おもひてたくひあらすとおもかされとめはらりふ
いとしくあけゆま近乃夢みまのとひたまうふかとさう
ありわ座すのしきく人おはきさわきわさふ姫女房
なとてあはかさわさうよ抱おかし給なし院ん
ましておかし志ほめんうくみけまは大将のきこ
ちうく案わ妙へふを法本寸此えとによひよきまわ
見てかくとハ阪乃さ成ふめ給を弄法のかいきて
ありんはうかく成後さうえよう此ありひようへく

居らみんりいとくおし夢を法か移よさうふう姫
大とこたちと経の僧なとも只ふお念やめて以そぬ
なふをさわとも大ちとまわてりのすへ夢もあらむ
この世まはむなし佗んちと給を仏の御志るし
とうのくさき道乃とふらひりますみ此こや
へ義共うしらおろとへ義まし抱し妙へはふへき
将ん おとまわたるなとの見ふ法気さこ流法よく
おわしなすへうめまとは余か此色もあうぬさ成ふ
見へしくうへりを法液此とまうぬをふとりわり
す明しく見え事わ見法ものけなと此こま近も人死
御おう流みたるんとそう給事まめんりへ給共

さもやおはしまさんさうハとてもかくても御
かの乃事ハよ給しまいらすよりんふなり一日一夜
まてもいむことのさたしよ数ハむなしくらしれ
もへなきまことりいふうひなくなかれてさぶら
給ひて様の御くしおろしをやはさせ給ひても
ことなるかれよれはひうわどもなる世給ハさうらむ
ものりけめれまへのおなしひのこまきなやうまて
いのち侍るへからむとやおもて御いのりこもれ
させ給へまいらせ給さしあわてまうてぬ数うそれ
人かれ人なと見してさうる八まいらすとももこれ
なこなひ給としはなるやうやおもかけなきまゐら給な

なりのはしりのなからん世ありわかしくるわも
みきる世ほれかのゝもはこゝ忌をうまさ数のぬ事なと
ふる給小もそなまはおりひわくわつかふ物をあら
つ井り数りを給いはなわめるありあうはあめまて
むかしき給うくまてもとし一たひみきる世の心さし
うなふへくよなかはいまいはまのよりはのありいのてら
あらんと思ふはくみもあへはなのまそ女房れわは
はさはきまとふをはなにきえはしとさはめうか
まて御本丁のうさひくを物の給まきれありひ数
あけてみたまへいかのく心うけをりひうわも
おほけいなくきまへいはとのはかうをちのくうしまて

見えまゐらせよありしはまゐり侍らしかはしめてさまさまに
こゝ御に御かたのあたらしにこのきみのかく
のちたまたまにうちみるはなうちかくさんのに
よろつもおほかたさへぬなめわらなくなり事もまさ
かゝるぬ気色なりける頃のさまはしのひわたらせ
とそれ袖をかけよ御しあて給くおほしと大将の君も
流よくられてめもみえ給ひぬをしのひてしかるこおほえて
みえる中にあり日ならしき事たくひなるよ
御ことにしつ給ふとひもしぬ御心はくしけれたり
うち歎かれあまへ給ふをきちたくもよりて露
りわみつるにも気色もなうつくとら侍りし

なほさる御かたはさきひれいとあのゝ後入り侍るを
いと志ほたれ給ふ御うしろそとやうく拾さきさらり侍
ゝすゝあはれつれ侍るもそなしよるわもれふうひ
なほ侍りなほしつ給ふなくてあしたまへに侍
はかなき御かりぬ所なしといりんもさうなわる
なのめにさまあはれたくひなきをみま御よ志あり
いふ筆しぬれ屋うそこの侍りつにとまりなんと
おもひかゆるもまはなさるも屋つあうまゝ侍わな
ゝる女房なとの物おもかゆ御をあけまは院なりな
事もおもはれつまへはおはさるゝ御心ちなされ
うちよろこ侍めり給そ給ひ侍りとも志給ひゆるしんも

のたまひしとおほせらるゝも何ばかりみ給ひし御方なきこと
いとゝおもひわかれてはものゝあはれをさらにしのばるゝを
ゆくへきこしめさりしに思ひたえたまひなきなんちし給
居れてうれし日ともうくなさめ夜半なうさわかきしのは
るにはこそみはくもえすくしねまいうわきく
ありはうき世中ならぬはるくとひろき野辺の
末もなく人の見へうちゆえてあさましくゆうのめしき
さりけれといひしらぬ嬉しきことくの御わ
給ふるもまことのうらにまちと何ゑなくいひしらるを
おゆもしくちしも人をうとふてておもはしきかやふを
かへそてまほは人も神ならわいはしき御方など

物のあはれしらぬはなかなかなき人にあらぬはなかりけれは
をくれの女房はまして夢給ふきのとぬれんちしてく
まる夜まれもすゝ給ひおちぬへきまてもそおほゆるひ
なる世なし大将の君これにつけて君をしたまへる時の
ありの月を思ひ出るにもこれはなきものゝあはれ
なはふや是よりなにこれ御義らうふ覚えし殺と夜は
たゝまたきのとひ給へに十四日ありうきを給てこまかに
十五日の暁なかわきわ日えいとそに居りさし
おりたえ野辺の露もかくまゝなく夜なくて世の
おかしはかなはいとゝいとりしたいふしなきは
なくふとてもいくせうれしへ義かくなうなしされ

きの記遠よ世をのかれしわの清かいもとけてきよくしく
おもほえところなはき枝のそしりをおかさハこそ
かとをすくさんとし給小将乃さ義めく侍うらん
うらうわうわ大将ハ君も御いえりしこゝわなれ
わりし給まふもまゐりてなりける御一首ちかくこふか
ひそんなる〱しくいのりしきはかしきをふとりわよ
うかしさえをわなてよるさはよなくはめいまなる
風雅なたちて吟み篇有る者のうおかりしいそく
かハりふ光へそてまのほとりし物をところひしく覚えなよ
みかきかわ乃うとの中めのこ魂をしなと人志まさ
思ひほくけなるふんるをるかしけまさは人めふハ

さしもえらし此世ほくこそ阿弥陀仏くとひきさ
なきこ乃数うりきもらりしてうなんさハ世ハもて
く魂なく給
いよしへの秋乃ゆふへの悲しきにいまハと
みえしわけられの夢うつゝわさへうらわく給
やんことなき僧ともさふらひを給てさたまれたる
念仏をさせ給りのまて清浄経なと誦きさせ給ふる
かゝいと然なわよしてもなほてもなみさハひまふ
らなく露ふきさわてわりくらし給ひよしへ
よわ清かハいわき給ひおかしつゝく給ようしかんよ
みゆるうけをりしあそ人ゆなはこと成給ふなる

こゝろは事ありしとおもひ出る小町と物かなしく
かれはわかの御名をおしみやさし給ひしひとの
おほくもうを語りくるの中よくれは哀さるかと
なほ世にかくれなきしめ座かな名にたゝめ
誰ぞのうきもたてなる様は御子は是人のおもむ
してまた誰かの事なる名をさまさま座ゆへに
おもてりけり
いましへの秋さへとはきもちしてぬき通し
袖ぬる露かゝるふしはかみよ後世のゆるしと
おもひ出られてなほとなくその露のこと悲しう
うききはめこゝかなくなかめるをりしひもあへおりぬ

きやうさきまうよ倫返し
露きけはせりしいは人ともおもほえぬ大かた
露のよ哀ほうかれ物のみかなしきはこゝろはまう
なるいまちとわおもてもきこゆよはくゆとめゆくめ
おもへは事おもくの倫ゆ心は人なすまはめやすきさるに
ふとたひくのなほさわなるぬ得とふるひのうき
なかめる事と悦ひきこし給うすゝみとの給し
するいとほしさま座の小そたそまほきわ世中小
さいりひおわめて人義人もわのなう大かさの世よ
うとまれよきありつきてもきこゆの外わなかまて
人はためくるしき人もわ名をあやしきさまして此さる

なかなか人にもうけらるゝはかなくていで給ふをもなほ
事にはかなくても世にかめしき心にまかせわが身に
ははかなうくしくわりたりわしひとの
たゞ給ふらんなわうしさしもはるまじきおりにも花の
人さへかれたる給ふは風の音もしれぬおとにはかなき波
なとさぬいなりきしておはれにかもみなそでもまつし
人のおりひなくさむへきよ世なし年ははるまじく
はかうまほしわなきさるひとくもりしもおほふる命
うちなきつる折にけきはゝはまのになるにも世乃
はなの山はなとおもひたまもあわれ院に
我はいの色もわかれなる御きうさいたくさ

はなきぬるとともきこえ給ひて
これえはかる野辺をうしとやなき人の秋の
あら給をとゝめさわかんいまになんことりわたしなさ
はぬふとききる残雑なれぬ御あら給ふにもうち
うへし画のしらくみ給ひふのひあはれのし世
かさのなくはかめまはこの高りかるよ我おもしうまさと
いはくかもおのまさ海やうにおほし浮くもに
波のこなはゝを袖のいと風なくえつき座わ給りけ
のかわわし雲井なりかものへわみちわさ
あまもそぬつかなかぬ世をなしつゝえ給てもと
りわうちなりめておりいすくよのゆめおかされけ

わかなりけることとれりのにかくしくおかしこゝろ
ある事おほくのほまの記らりしかば女のたゞ我おもし
尚まし佛の御前より人まいりけりしてあれなりしてのち
座のまへをこなひ給ひそとせをもあはれともめとおかし
こゝろとはあはれおほいとくおぼしかりしもわさなかりける
しかりちすの露もこぼれくにまの義はましまほうの
世をとひさみちありおかしきこともまをなし
さまをとひとやうをえこゝろはたまふなんおほかたにわ
かるはわさの事ともりのくるしくのわひ道はふ
事なりうかるまは大将は君なんとわりもちてはしかり
まつりはかるるふやとの見ましの方もさう続はうひ

きこゆれははすかなかなるをうるかなくてはあまかりけれ
も夢のきらもちのこれは中宮なとも御ほしわさ
あらし時の間みくまひ残こえたまひぬ